



有松まちづくりの会役員会 (10月24日)

10月10日で会期を終了した「国際芸術祭あいち2022」の担当大口氏より、地元での協力に対する謝辞があり、有松への人出が8万5千人程であったと報告がありました。

22日に開催された緑区区民まつりの有松まちづくりの会ブースに多くの方が立ち寄られた由。

11月26日に有松で開催される町並み保存連盟の東海ブロックゼミについて、まちづくりの会の会員の参加希望者はファックスでの申込としました。事務局052-621-1046、お名前と連絡先記入。

国際芸術祭あいち2022 閉幕 (10月10日)

閉幕直前の10月8日、有松を歩いてきました。3連休の初日、天候に恵まれ朝早くから見学客が訪れていました。2か月以上にわたる国際芸術祭、後半になっても出足は衰えていないようです。

あいち2022では、主会場の愛知芸術文化センターの他有松など伝統産業の盛んな地域も会場になりました。

地元とコラボした作品について紹介します。



チケットを求める人々 (旧山田薬局前)

● 宮田明日鹿「有松手芸部」

10/1 NHK総合「ショートストリーズ#33人生を編む」から暮らしの中にある編み物がなぜアートなのか。キュレーターは「編み物を、家の中で女性が趣味でやっていることと言われがちだが、ちゃんと生産的な行為であり、芸術的な価値もある。地域に代々伝わってきた現代の営みも、現代の芸術であるという考えから見ると、手芸部にも美的な要素もあるし手仕事で歴史と美学も一緒に編み込んで伝えていく活動にもなっている」と。



編み物中

● AKI INOMATA「彼女に布をわたしてみる」

10/7 朝日新聞朝刊からミノムシが有松・鳴海絞の色とりどりの布をまといながら葉を食べる映像作品(右写真)は、まるで花のよう。職人たちと試行錯誤を繰り返し、新たに「ミノガ絞り」を生み出した。芸術祭テーマSTILL ALIVE(今、を生き抜くアートのちから)への応答として、「生き物のクリエイティビティーと継承されてきた手仕事のコラボ」とINOMATAは話す。



有松天満社秋季大祭 特集

3年ぶりに山車まつりが行われました。減少傾向ではありますがコロナの感染状況を考慮して、夜祭りは無しで実施されました。いずれの山車も「やっと思える」と当日前から熱気のような雰囲気が漂っていました。

右の写真は、イオン有松2階通路の"山車まつり紹介コーナー"です。時折パネルを覗き込む方が見えました。



◆ 祭り前に① 人形衣装を新調しました

9月25日山車会館の展示車輦入れ替えで、神功皇后車は西町に。街灯を避けたり天井の低い山車庫に入れたりの大変さに気づかされました。西町で待っていたのは神官の新衣装。数人がかりで着替え。人形方は、神官が御幣を両手に持っているの着せる順番を幾度も確認していました。

次の山車会館展示は中町唐子車。文字書き人形の衣装も新しくなりました。

西町:神官の衣装と着替えの様子 中町:文字書き人形



神功皇后車



旧→新

◆ 祭り前に② 囃子方が練習しました

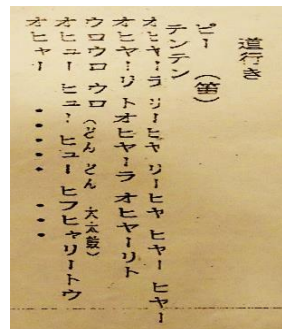
祭りの10日前からお囃子や人形扱の練習が行われます。中日の9月25日夜、3町を訪ねました。中町年行司では女性を含む15人程が車座になって練習。学齡前から年配の方までが熱心に取り組んでいました。笛担当の方の、マスクをしたまま笛が吹ける工夫をしたマスクが印象的でした。

東町では人形の練習台が組み立ててありました。山車会館ができるまではこのように練習したとのことです。

西町年行司でも、練習台が置かれてありました。訪れたときはからくり人形に衣装を着せるのに忙しくしていました。



中町の練習風景



囃子の歌唱譜



東町の練習風景と練習台



西町の衣装着せ

● **前夜祭の様子** 18:50社殿で神事が始まりました。厳かな雰囲気の中太鼓の音を合図に宮司が祝詞を唱え、後に御幣を梵天に付けて出発。鈴木総代長以下10名程が、西町の端で左回り3周後秋葉神社に向かい、中町年行司に梵天を立てて終了。各町の山車は19時間前後に囃子込み出かけました。写真は中町です。



○ **当日の様子** 3年ぶり開催に祭り参加者、特に山車関係者の表情は喜びに満ちていました。コロナ感染防止のため山車曳きは15時迄。絞会館駐車場での3輦揃えや夜祭りは中止でした。3年前を上回る人出に感じました。

山車を曳く綱に多くの子どもが見られます。松野根橋や中町交差点での車切りは、3町特徴があります。西町や中町は山車の楫棒の後ろに人が座り複数回回りますが、東町は山車が大きいこともあり1回のみ。これもまた良い。車切りの周りは多くの人がカメラを構えています。車切りが終わるごとに大きな拍手。皆が一つになっています。

西町の端でのすれ違いも圧巻。天満社への総参りで祭りは終了しました。



■ 祭りあれこれ

山車会館での新旧200年を隔た正面幕展示は圧巻。天狗との撮影会は初の試みではないかと思ひます。

天狗と写真→③
を撮ろう
子供宿 →④



↑①布袋車正面幕
新旧展示
→②町並みツアー
の様子



安保成子絞り展 (10月4日～10日)

青海波→

安保さん(写真右端)は伝統工芸に興味を持ち有松へ。絞り会社に8年半、国際絞り会議参加を経て独立。伝統をモダンデザインにとの想いでものづくりを行ってきたと言う。青海波などの展示品の他、ストールや自身の製品の販売もありました。 於：ありまつ舎通ぐ



シボリコミュニティ名古屋作品展 in有松 (10月1日～6日)

絞り作家早川嘉英氏は、1985年蔵工房での創作活動を始めた同時期にシボリコミュニティの活動も始められた。絞り技法のノウハウを教える教室ではなく、各自が絞りに関わっていく中で伝承の技を「今日にどう生かすか」考える場であるという。自由でのびやかな作品づくりが特徴。今年の作品展には7名が2・3点ずつ出品。 於：棚橋邸



嵐絞り・藍染プロジェクト 2021年度 卒業制作展 (10月8日～10日)

作家早川嘉英氏を中心に、絞りの伝承と人材育成を目的にした「嵐絞り・藍染プロジェクト」の卒業制作展。全国から集まった初心者・経験者が昨年9月から7か月にわたって研修を受け、終了後も独自の発想で作品制作を行ってきたという。仕事や子育てなど生活に追われる中、現代の絞りを創造するスタートとなったようです。 於：棚橋邸



緑区観光推進協議会の取り組み 1 いろいろどり緑区展(10月8日～11月7日)

昨年、一昨年に開催された緑区フォトコンテスト「いろいろどり緑区」の入賞作品が名古屋駅のホテルロビーに展示。

名古屋マリオットアソシアホテルでは、上位3作品と有松・鳴海絞りにちなんだ作品が紹介されていました。大いに有松の宣伝になったのでは・・・



催事・行事の予定

- 11月5日(土)6日(日) 10:00 晩秋の有松を楽しむ会(ミチアカリ含む) 有松東海道一帯
- 11月6日(日) 10:00 アリマツマーケット 有松天満社一帯
- 11月20日(日) 7:30 かえで道清掃 有松まちづくりの会
- 11月21日(月) 18:00 有松町並み相談会 コミセン
- 11月22日(火)23日(水祝) 10:00 有松コミセンまつり コミセン ※舞台発表は無し
- 11月26日(土) 13:00 東海ブロックゼミ有松大会 絞会館
- 11月28日(月) 18:00 有松まちづくりの会役員会

発行者 竹田嘉兵衛(有松まちづくりの会 会長)
編集者 加藤 明美(有松まちづくりの会 広報部長)
pegasusb@mc.ccnw.ne.jp

有松まちづくりの会は、ホームページを公開しています。



芸術の漂うまち 有松 part2

7月30日から行われた国際芸術祭あいち2022は盛況のうちに終えることができました。

地元有松も、作品展示会を開いたり町並み案内をしたりと訪問客を温かく迎えているように感じました。そのような取り組みを紹介します。



あないびとの会による町並み案内風景

① Wonder heart Project ～アール・ブリュット展～ 9/21～9/25

「ありまつ舎通ぐ」では、株式会社ハートウイングによる障がい者アートの展示会が開かれていました。豊かな彩りに圧倒された空間でした。代表の永山雅美さんが丁寧に作品紹介をしてくださいました。単に作品展示だけでなく、創作活動を支援したり額装して販売に結び付けている姿勢に共感しました。



② ワンダーハートギャラリー 6/24～10/16

トポス有松にはアール・ブリュットの作品展示の他に、ワンダーハートの可愛くて思わず笑顔になってしまうようなポストカード・キーホルダー等が販売されていました。



←② ↑①

※ アール・ブリュットとは？

トポス有松 店内の様子

伝統や流行・教育などに左右されず、自身の内側から湧き上がる衝動のままに表現した芸術。障がいのある人、子どもなどの作品に用いられている。

③ はじまりのあーと展 in 有松 9/28～10/3

豊明福祉社会メイツに集う表現活動を行う仲間たちの作品が所狭しと展示されていました。「今回の作品展が障がいのある方を理解していただく始まりとなることを願っています」との主催者のメッセージは、来場された方に確実に伝わっているのではないのでしょうか。



④ 伝統工芸ワークショップ

NPO法人あいちヘリテージ協議会事務所（川村家西蔵）では、各種ワークショップが8月から10月の土曜日(不定期)に行われていました。金継ぎ・彫刻体験・蒔絵体験などですが、訪れた日には瓔珞(ようらく)イヤリングにも取り組まれていました。



※ 瓔珞とは、仏壇を飾る仏具や仏像の装身具のこと。

草月いけばな うつぎ会展 結成70周年記念(9月30日～10月2日)

東海道沿いと竹田邸を中心に出品者36名の作品が有松を今年も彩っていただきました。合作による大作(写真左)や竹田邸三番蔵(写真右)などには個人作品も飾られていました。



深掘り 有松の山車 布袋車

東町の山車は、大将人形が七福神の布袋であるところから、「布袋車」と呼ばれています。かつて若宮祭りで曳かれていたもので、明治24年(1891)に東町に売却されました。下玉屋町(現在の中区錦二丁目あたり)の祭車で、建造年は不明ですが墨書銘から文政7年(1824)までに本体は完成したと考えられます。

名古屋型の特徴を備え、高欄や彫刻などが張り出さないのは古様の要素かもしれません。唐破風には雲に波濤の彫刻、2階高欄部下半分は波模様、更に下には宝尽くしの彫刻(寛政6年1794作)が切り抜かれています。

大幕は文化9年(1812)にかえられ、猩々緋に金糸で、正面に鳳凰、右に亀と龍、左に麒麟が描かれています。下絵は山本梅逸によるもの。後面の見送り幕には、丹羽盤恒子(にわばんかんし)の書で詩文が書かれています。

到處盡逢(これから向かう処では)
歡洽事(よろこばしいことに出会うでしょう)
相見總是(いつもお互いみんなが)
泰平人(穏やかでゆったりした人でありましょう)

大幕は損傷が激しく、現在復元新調中です。水引幕は、明治25年(1892)に制作され、白羅紗に雲鶴の刺繍です。

からくり人形は、大将人形の布袋と蓮台に載った文字書き唐子、蓮台を廻す唐子、麾振り童子。文字書き唐子は、人形方が文字板をなぞり人形に文字を書かせるからくりです。人形はいずれも2代目玉屋庄兵衛による。 大幕↓と見送り幕→



高欄下↑
水引幕⇒



《布袋車の歴史について教えてください》

延宝3年(1675)、布袋車は若宮祭りに出されていました。7輦の名物祭車が知られ、このうち3輦が現存し、うち1輦が有松の布袋車です。かつて名古屋城下における祭礼を知る貴重な山車になっています。右の猿猴庵が描いた図(1812~23)には現行の山車と共通点も多いです。

明和5年(1768)蓮台の上の唐子が文字書きに改められました。左の内藤東甫が描いた図で以前の様子が分かります。布袋の袋の中から唐子が飛び出し、一人が球を持ってきて戯れ、もう一人がその球をくれと「赤ペー」するからくりだったといわれます。



張州雑誌 草稿



尾張年中行事絵抄